110

读花

江苏工业学院图书馆
藏书章

鏡花全集　巻十八　第十八回配本（全二十九巻）

定價二千二百圓

昭和十五年十二月二十五日　第一刷發行
昭和五十年四月二日　第二刷發行

著者　泉鏡太郎

發行者　岩波雄二郎

發行所　東京都千代田區一ツ橋二丁目五番五號
株式會社　岩波書店

印刷　三陽社　製本　松岳社

落丁本・亂丁本はお取替いたします

© 泉名月 1975

目次

鴛鴦帳（大正七年六月）……一
芍藥の歌（大正七年七月）……三一

鴛鴦帳

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

序

一寸、内端話をいたします。此の新篇一冊を書肆さんに約束したのは、昨年の九月の事で、年一杯と云ふと身賣じみますが、然うではありません。年内に書上げて、春の初賣に間に合はせ、澤山儲けさしてあげるよ、と云ふ手練を以て、例の苦しがりが、其の月の算段に前借を申込みますと、早速承知をしたのでございますが、馴染のない書肆さん、とは言ふものの何うだらう、と半分、當にしないでは、居られないのに、居ました處、其の九月二十九日、三十日は御存じの大暴風雨でございました。前日も可恐い大降で、車軸を流す雨の中を、羽織袴で止善堂の眞四角だが憎くない主人がみえて、約束通り耳を揃へて、……羨しがるに及びません、いや、もう聊少な儀で、しかし私に取つては……大金を渡しました。大雨の中と言ひ俥でお運びはお氣の毒だと申しますと、贅澤なやうですが、濡れた膝でお疊を濕らしてはお氣味が悪からうと存じて一臺驕つて駈つけましたと云ふ挨拶。これぢやあ期日が間違へられますまい。處で、腹案は七八年前から、世帶持の懐中にも此ばかりは暖めてあつたのでございますから、早速折りめのつかない處を取かからうといたしますと、私どもには書きだし、皆様にはよみはじめ、と云ふ處がなか〳〵樂にま

ゐりません。一體は江月園の主婦照吉のお新が、柴又あたりの川魚料理か何かで、三個の色魔が、突羽根の娘を闘取にする處を、それとなく小耳に挾むのを「第一回」にしようと云ふ考へでございましたけれども、一を上げても三を下げても何うしても隅田川の流に調子があひません。まだ一枚もかけないで十月の九日に成つたのです。此の日は、私の父の命日ですから、何でも一行でもと思ひましたが、目を据ゑたばかりでそれも出來ないで、十二日の夜は丁ど三番町の二七の不動様の縁日。くるしい時の神だのみ、ふと思ひついて、江月園の寮番が、那謨三滿多を唱へながら、月の夜ふけに綾瀬へ出掛ける處からかきはじめたのでございます。が六七回、次の「小搖卷」へかはつて、法學士板倉光年をはじめて御目に掛けようとする處で、又つかへて、一寸も前へ出ないのでございます。

月日の方が勝手次第に駈足で飛びますから、忽ち月末と成る、此の瀬戸を凌ぐのに、又前借を申込むと、快く持參に及んでくれたのが、大の月ゆゑ勘定前の三十日の夜。今度はお天氣は好うございました。大分御進行で、勿論、と戰場往來の兵なれば、矢玉の中に悠然と、脂下つて答へたが、三百枚は要らうと云ふのを、まだ三十枚に滿ちません。書肆さんが歸つたあとで、(堅いお方ですね、お金子の包を手首に結へておいででしたよ。)と家内のやつが威かします。あゝ扨は先方でも餘り樂な金子ではあるまい、さあ、恁うしては居られないと氣がせくと尙ほ不可い。苛つ

てあせつて、果は弱つて、頭から夜具を被つて寢て居る處は、酒さへ飲まねば病人でございます。え、、前借だにあらずんば、其の病氣と言つても斷つて書かずに濟む、が然ういかないで、義理に成つて、此の前借に苦む處は、篇中の苦界の姐さんたちと、餘り相違はございません。

漸と筆が運びました。「蠟燭」あたりまで一氣に進んで、此の間に雪岱さんに表と裏の見返しを誂へました。自分で申すも如何なれど、止善堂も店の看板にと云ふ大奮發、近來の美本に仕立てようと云ふ意氣込の處へ、雪岱さんが私と違つて、色ばかり、まだ慾を知らない人ですから、手間を構はぬ骨折最中、また月末になつたでせう。十一月、卽ち前借、おなじことでお恥かしい、內金、先借とした處で、借込んだのに違ひない。新年の間に合ひませうか。もう半以上出來て居ます。あとは徹夜で、十日前は、と今度は其の氣で請け合つた時が、漸く「水神伯」と云ふ處だつたのでございます。なか〳〵何うして、あと十日や一週間で遣拔けられよう筈がない。弱つたな、今度は師走で、千倉ケ沖の大晦日。書肆の顏も三度と聞けば、もはや金も貸すまいし、と云つて夜遁げも出來ないし、義理は惡いと知りながら、他を稼いで店賃米代勘定せずには置かれませんので、此の鴛鴦は凍らぬやうに、密と炬燵に寢かして置いて、此方は夜稼ぎ荒稼ぎ、凄じなんと愚な中へ、無理な催促にも及ばないで、止善堂から、御歲暮に、砂糖到來は苦かつた。漸と新年おめでたう。さて早や凡夫の淺ましさは少々飲まずに居られません。御免なさい、一月は何も出

來ず。でも内心の苦しさは、二月紀元節の夜でした。日本橋邊の或家で、私一人はやけ酒を飲んだ時、實際つらい、と染々言ふと、金子と力のある色男で、割前勘定の大株主芝白金のやんちやん息子、目下大阪のぼん〳〵たる水上の瀧太郎が、一座の雪岱に囁いて、泉のために前借を其の書肆へ返さうよ、明日行つて談判をして下さい、然うしたら催促されずに濟むだらう、と目を光らして言つたるよし。爾時は醉つてて知らず、後で聞いて泣かされました。尤も私には内證で計らふ約束だつたさうですが、雪岱さんが中を取つて、繕つて、餘り急がせない方が可からうと、お庇で此の人まで氣が强かつた。それは成程、いざ、と成れば、金子を返してあやまれば濟む次第ですが、こゝに濟まぬのは作者へ貸したばかりでない、書肆さんの仕込の方は、表紙、みかへし、扉をはじめ、箱張の繪に至るまで、板木代、摺代、紙代と、もう積んで出來上つた此の仕込が些や少々の格ではないので、私だけ返すから、それで可いでは納まりません、と云つた處であせるばかりで、仕事は一向捗取らず。實は正月七草の晩に「第三十回」を半（孰方へ）とまで書いて、其ッ切、人の情に奮起して、二月の二十日に（夜露にめげず。）とまでで又續かず。二月の間に唯半枚の十行ばかり。又書けなくなつて居る處。……もう恁うなると附元氣の岡惚の顏なぞより、水上さんに逢ひたく成つて、三月の十日から大阪へ行つて二十日まで遊んで來ました。

書店の驚駭一方ならず、繪の刷上りがこればかり、と肩の上まで手で仕切つて嘆息をする始末。

喧嘩ものつぴきも成るのぢやない、花時までには間に合はせる、と柳のやうに受流しても、春風ばかりは吹いて居ず。今度こそは、と稿を繼いで、「岡釣」の一段を漸と通拔けたのですが、何故か彼處の遣憎かつたことと言ふものはありません。遊んでも居ましたけれども、少しの處にやがて三月。人間一人退治るのは煩かしいものだと思ひました。洒落や串戲を言ふやうでも當人は唸るんです。あとは故障なく五月に入つて、月末の二十四日、此の日は母の命日に、「處女の五十四、五十五。」彼處を夜ふけに書きました時は何とも言へないなつかしい氣がしまして、我ながら優い手に抱かれたやうで思はずほろりと落涙をしたのであります。夜ふけ人靜まつて、此の心持は、政治家も、學者も、財産家、惟ふに宗教家も、一寸誰方も御存じあるまい。作者冥利の、果報よ、と嬉しいことに存じます。然も、其の夜は、あとの「船の行方」を書きますのに、濱町を視て、折から緣日の清正公へ參詣をして歸つてからなのでございます。すぐに續けて、とに角、二十七日の正午過ぎまでに出來たのです。扨て此のもの語は、都合あつて、いろ〳〵前後をいたして居りますが、法學士板倉と萩島家小照とのなれそめが、そも〳〵のはじまりで、あひゞきして居た築地の待合が金子につまつて不首尾に成ります。こゝが丁度、「霜の籌火」の處で、あとの「過ぎし後朝」の場と同じ朝の出來事なのでございます。こゝで、小照が先の客の猪村大八に采女橋の河岸の船で出會ふのです。で、築地の待合が不可いために濱町の(苾)と云ふ内で逢ふ間に、事件が

起つて、小照の方は客につれられて伊豆へ行つて、そこで止むを得ない事情のために、かへり道で、眞鶴の沖で汽船が衝突をしたのを汐に、身を投げたのを救はれます。此の時、水底の其の姿より帶留の金具の光が月に輝いたのが目標に成つて、人に助けられたと云ふ、其の帶留の銀の白鷺の金具に淺葱の紐のついたのは、(小照が締めて居たのは違ひます。)輝方さんがいま形見に祕藏して居なさいます、蕉園お百合さんの大すきな持ものだつたのを借用して使ひました。

序に照吉の爪彈は、實は富本か一中なぞだと、底が知れないので可いのですが、恥かしいが、うまいのは一寸聞かれず、知らないでは情がのりませんので、撫子の小唄にいたしましたが、これは實際篇中關係の一婦人から、いゝ音を直接に聞いたのでございます。一方光年の方は、其の間に、不首尾な惡の歸途を、大川端で小齋田儀一との出會に成つて、それから判事の職に就く。一旦死んで蘇つて小照は新橋へ歸つて、仔細あつて、萩島屋照吉と云ふ大姉さんの名を貰つて、それから繁昌して、江月園のあるじと成ります。其の間三年ばかり逢はずに居たのが、淺草觀世音の參詣に、花川戸で逢ふ處が「邂逅」の一條。年月が過ぎて、江月園のあるじが、其の日も逢ひに來る板倉のために、嫁菜の花を活けようと、薄の土手へ出た處で、水神の裏田圃で、三人の色魔が、鳥料理、筑羽根の娘お縫を鬮取にしようと云ふのを立ぎきする、此のお縫は、照吉が名を貰つた其の大恩人のかくし子なのですから、其のために或覺悟をばいたします。其の夜の出來事

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

が、第一回の「月の綾瀬」で、さて、毘沙門堂で、再び猪村大八に出會ふのでございます。「鷺の帶留」からは、ずつと順の通り。お讀みになれば分るのですが、これは、ほんのお子供衆のために申すのです、――なぞとね、部數を賣りたいものだから。勿論、大骨折の書肆のために――なんのつて、とあたり近所、遠い處は博多あたりでお笑ひでせう。……打あけました處……内々、ですよ、これは印税と云ふのですから、作者も分と云ふのが入ります、卽ち酒が、これも内證。

つきましては、雪岱さんが丹精と、止善堂が大勉强にて、これだけの裝幀を、精々勉强仕り、一圓ぐらゐにて、さしあげようと云ふ心組でございましたが、恐るべきかな、作者がなまけて居るうちに、世界いよ〳〵大戰爭にて、米はあがり、薪はあがり、醬油はあがり、紙のあがること、前代未聞、三月中だけにて二割三割暴騰の大椿事、いつ戰爭が止むだらうと、紙價を可恐がる心の中、お推量遊ばして澤山々々御もとめ下さいますやう偏に願上げ奉る。依て謹んでかしは手して、迎福招慶、柏枝大橘、大吉利市、大吉利市、と云爾。

五月雨の雨は三馬が宿醉と青葉の綠は京傳が慾心深き處をかねたる如き

番町の借家の二階に識。

于時
大正七戊午年六月吉日

鏡花小史

月の綾瀬　小搔卷　髮の雫　墨染　蠟燭　霜の篝火　水神

伯　岡釣　過ぎし後朝　操　其月其日　邂逅　鷺の帶留

寶玉商　龍女の寢卷　引手茶屋　獅子の小筐　處女　王將

船の行方

月の綾瀬

一

向島水神の森のあたり、庭に池あり、舟もあり、櫻が下は落葉して、萩の枝折戸、芙蓉の袖垣、寂びたる中に艶のある、江月園とて、新橋の藝者萩島屋照吉、本名お新が、貸席を兼ねた寮住居の、門番、風呂番兼役で、名も番藏と云ふ寮番の、月夜に提灯を持つたは堅親仁。

「那謨三滿多、波曰羅赧。」

明王が慈救呪を誦しながら、獨り綾瀬の方へ、土手を行く。

やがて夜半の一時である。露は草は透通り、風なき蟲の聲冴えて、十六夜ばかりの月の影天心に澄渡れば、隅田川を漕ぐ船は、鵲の浮べる狀して、靜まりかへる川面に、艪の音も聞えねば、水も流るゝものとは思へぬ。筑波や彼處、空遙に、一刷、二刷、すら〳〵と三條四條敷重ねた浮雲の、緩やかに漂へる、宛然筏を流すが如し。時に遙に梟の寂しき聲が、天の河漕ぐ船頭の掛聲

めく。

「那謨三滿多、波曰羅赧。」草履をすた〳〵運ぶに連れて、櫻の落葉の、夜目にも薄樺色したのが、爪尖にばら〳〵と鳴つて、提灯の灯に搖るゝ風情、乾びた蛾が蘇生つたやうにも見えるし、やがて定に入らうとする蝦蟆の群が、なごりの月を見て踊つて居るらしくもある。

「那謨三滿多、波曰羅赧。」

なか〳〵梟の怪しい鳴聲や、土手に散敷いた木の葉の異つた形などに驚いて、歸依の呪を念ずるやうな、鳥居數の少い親仁では無いから、一人歩行きの心細さに、念佛を唱へると思ふと違ふ。

實は、行先は知れて居て、もう疾くに歸らねば成らない女主人が、何に手間を取るのか知らず、以ての外歸宅が遲い。それを搜すとまでも無く迎ひに出たので、親仁が篤實な心から、ほつても有るまじい事とは言へ、主人の身に、萬一の恙の無いのを祈るのと思へば可い。

「那謨三滿多、波曰羅赧。」――が、しかし恁う唱へる口の下から、

「菜を蒔く算段だ、婆樣だ。」と、去年の初午、寮内の稻荷祭に、裏田圃の垣根に點した地口行燈の、餘り喝乎とも參らないのを、うつかり舌へ滑らかいて、月夜の苦笑は何う云ふ氣だらう。

いや其の筈、其の筈。女一人だと云つて、夜中だと云つて、如何に歸りが遲からうが、決して案じるほどの事はない。行先も知れて居る……で、其の行先は、やがて鐘ケ淵を過ぎた綾瀨の毘

沙門堂で、女主人は其處へ詣でたのである。のみならず、寮の露地を土手へ出口に、小店を構へて、菓子、果物の商ひする茶店の亭主が、車帳場を兼ねて居て、其が供をして居るのである。

唯、聊か心懸りと言ふは、時刻が時刻なり、女主人の參詣は、内から心構へをして出たのでない。今夜は豫て懇意な客の、四五人藝者を連れたのが、晝過ぎから、人數の割にしめやかに遊んで居て、萩に雪洞の灯が入ると、其處で何とか云ふ、評判の盲人の、（お園六三。）の新内が一段。續いて（膝栗毛の巫女。）が濟むと、一時どつと陽氣に成つた。酒のあとを、露青し、綾瀬の蘆に遊ばうと、一組が袖を連ねて、簪の珠も星の如く、月に輝いて出たのに交つて、土手まで主人ぶりの道しるべ、籠行燈を汐入の小川添ひに、小褄を取りつつ庭下駄で送つたまゝ、さて歸らぬのであつた。

客と藝者の其の一行は、綾瀬の岸の、蘆の小屋の寢た戸を敲いて、其處で船を誂へて、隅田川を漕がせて來て、寮の裏から、水門を開けて歸つた――それが、もう先刻であるのに――

皆も案ずる……其處で、番藏が迎ひに出掛けた。

二

土手に、板戸を半ば鎖して、土間に引入れた縁臺の上に、手提の籠行燈の灯の消えたのが載つ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com